

知事と県民の意見交換会（秋田地域振興局）議事要旨

- テーマ : コロナ禍におけるマイクロツーリズムについて
- 日時 : 令和3年7月14日（水）10:00～12:00
- 場所 : 秋田県議会棟2階 特別会議室

- 参加者 : A氏（ノースアジア大学法学部・国際観光学科観光コース3年）
B氏（ノースアジア大学法学部・国際観光学科観光コース3年）
C氏（ノースアジア大学法学部・国際観光学科観光コース2年）
D氏（秋田大学教育文化学部地域文化学科4年）
E氏（秋田大学教育文化学部地域文化学科4年）
F氏（国際教養大学国際教養学部グローバル・スタディズ課程4年）
G氏（秋田県立大学生物資源科学部アグリビジネス学科4年）

佐 竹 敬 久（秋田県知事）
須 田 広 悦（秋田地域振興局長）

知事挨拶

本日は、お集まりいただき感謝申し上げます。

ノースアジア大学で、2回ほど特別講義をしたことがあるけれども、その時は、インバウンドの話が中心で、まさか今のような状況になるとは思わなかった。

コロナの問題が落ち着くまでは少し時間がかかる。ただ、そういう時に、インバウンドやアウトバウンドだけが観光かと言うとそうではなく、遠くに遊びに行くことだけが観光ではない。県北出身の方が県南に行って、観たことのないところを初めて観たとの新聞記事があったり、昨日も横手のふるさと村で意見交換会があり、修学旅行で来ていた秋田市内の小学生に「いつも来ているでしょ」と聞いたところ、「ここ初めてです」と。これは、秋田県の地形にも関係がある。南北に非常に広く、中央部や内陸部には交通網がほとんどない。内陸線が一部あるけれど、道路はあまり良くないので、県北と県南は意外と離れている。県北はどちらかというところ青森に近く、県南は岩手、宮城に近い、中央はなんとなくという感じで、分断されているような県のつくりなので、意外と地元のことを知らない方が多い。逆に言えば地元の良さを知らずに「秋田にはなんもない」とよく言うが、実はたくさんあることを自覚できていない。

こういう時こそ、マイクロツーリズム、地元あるいは近場をよく見ることで、様々な観光資源に気付くことができる。これをある程度盛んにすることで、単に観光を楽しむだけではなく、地元をよく知る、地元をプライドを持つ、自慢の種を増やすといった効果もある。

私ども高齢の年齢層では、観光というと、遠くに行き、お金をかけて宿泊というイメージであり、その感覚がなかなか抜けない。逆に言えば、若い方は観光かどうか分からないけれども、まちおこしや地元の様々なイベントを通じて、マイクロツーリズムを盛んにしている。そういうことができるのは若い人であるので、本日は皆さんから、マイクロツーリズムだけでなく、周辺の関連する意見も聞いて、今後の観光行政、地域活性化に生かし

ていきたい。

本日は、自由な発想で遠慮なく意見を述べていただきたい。

参加者自己紹介

(A氏)

秋田県出身、秋田商業高校卒。

ダンスが趣味で、大学でもダンス同好会に所属して3年間やってきた。好きな食べ物はメロンパンで、中学校からはまっており、新作が出るとすぐに買い集めたくなる。また、リラックマが好きで、文房具はほとんどがリラックマである。先日、リラックマのシャープペンシルをなくしてしまい、早く買いたいと思っている。嫌いなものは特になく、何でも食べる。

(B氏)

秋田市出身、明桜高校卒。

小学校4年生からバスケットボールを続け、高校と大学でキャプテンをしており、日々練習に励んでいる。

好きなものは、旅行。コロナ禍で、県外に出られない状況は苦しいが、今後社会人になったら、今までの分、自分の好きなところに行きたいと思う。

乗り物も非常に好きで、車で行こうか、新幹線で行こうか悩んだりするくらい好きである。

(C氏)

秋田市出身、秋田北高校卒。

中学校の時は、吹奏楽部に所属していた。

好きなものは犬で、秋田犬を好きなものとして挙げたのは私。家でもコーギーという足の短い胴の長い犬を飼っている。

嫌いなものは運動であり、昔から苦手で、これといって運動ができたことがない。

(D氏)

秋田市出身で、秋田中央高校卒。

好きな食べ物はソフトクリームで、大学生になってからよく食べるようになったが、道の駅や道端で見つけた時も、立ち寄って食べてしまう。

嫌いな食べ物は、辛いもので、わさびなども得意ではない。

本日は、県外出身の方の意見を聞けることがすごく楽しみである。

(E氏)

宮城県名取市出身。

大学では、よさこいサークルに3年間所属しており、イベントを通して県内の方々と交流するのが、すごく楽しかった思い出として残っている。

好きなものは焼き肉で、一緒に食べるお米がすごく美味しいと思う。秋田県のお米も観光資源になり得ると思うので、少しでも協力できるように、意見を述べたい。

(F氏)

神奈川県横浜市出身。

秋田とスポーツが大好きで、ラグビーチームで通訳として1年間活動していた。最近は、秋田ノーザンハピネッツも応援していて、毎年、シーズン終わりに県庁に挨拶に来られる選手に会える知事が羨ましいと思う。

(G氏)

兵庫県明石市出身。去年の夏に母が男鹿市に引っ越してきたので、そこで一緒に住んでいる。

大学では、竿灯会というサークルに所属しており、太鼓を叩いている。

好きなものは食べることで、特に果物を食べるのが好き。嫌いなものは、お肉の脂身で、噛み切れないものや飲み込めないものが嫌い。

姉が公立美大出身で、姉もこの意見交換会に参加したことがあるので、私も頑張って話したいと思う。

事例発表

ノースアジア大学 法学部・国際観光学科観光コース

3年 A氏

B氏

2年 C氏

「マイクロツーリズムの取組事例」

(B氏)

マイクロツーリズムとは、総合リゾート運営会社である、星野リゾートの代表の星野佳路（よしはる）代表が提案した、新しい旅のあり方である。

星野リゾートのウェブサイトによると、マイクロツーリズムとは、遠方や海外の旅行に対し、三密を避けながら地元の方が近場で過ごす旅のスタイルで、自宅から1、2時間程度の距離で安心安全に過ごしながら、地域の魅力を深く知るきっかけとなるとともに、地域経済にも貢献するものである。保養目的で旅館やホテルに行き、温泉や自然を探索するほか、料理を楽しみ、活力を取り戻す滞在旅行と定義されている。なお、ミニマムツーリズムという言葉も同じ意味で使われている。

マイクロツーリズムはコロナ禍によって注目され、旅行業界でもよく使用される言葉となった。また、三密を避けられるという点では新たなメリットと言えるが、自宅から近距離のいわゆる近場の旅は、実は従来から存在する旅行形態である。例えば、温泉旅行、いわゆる湯治は、江戸時代以降、農村では農閑期の湯治が盛んに行われるようになり、秋田県を始めとする東北地方では、明治時代以降でも、農閑期や冬場の湯治が盛んであった。このような地域に根づいた湯治も、マイクロツーリズムの一つと言える。もともと秋田県には、玉川温泉、乳頭温泉郷、秋の宮温泉郷といった魅力的な温泉湯治場がたくさんあるのもこの地域に根付いた理由の一つである。

(C氏)

これから秋田県が取り組む際の参考になると考えられる、全国のマイクロツーリズムの事例を紹介する。

最初に、マイクロツーリズムを提唱した星野リゾートの「星のや東京」の事例である。

「星のや東京」は、都内で心も体もリフレッシュする温泉旅館滞在と紹介されている。東京都心の大手町にある「星のや東京」は、都内在住者に向けたちょっとした息抜きとして、

温泉旅館でのひとときを味わえるプランを紹介している。

自家用車やタクシーを自宅から走らせ、気付けば客室でそのままチェックイン。滞在中は、人との接触を極力避け、温泉とプライベート空間でのおいしい食事に加えて、体を動かすアクティビティを体験し、三密を回避しながら、気分転換できる2日間を過ごすプランである。料金は1人1泊4万円前後となっている。

次に電気自動車をマイクロツーリズムに活用した実験的な取組を紹介する。自動車メーカーの本田技研工業は、電気自動車の「Honda e」に乗って、マイクロツーリズムに出かけるプログラム「はじめての地元 with Honda e」を2020年11月17日から12月25日に石川県金沢市で開催した。

本プログラムは、金沢市在住者に「Honda e」を無料で貸し出し、「アート&クラフト体験」、「ローカルストリート巡り」、「歴史と自然のいいところ探し」の3コースの中から好きなコースを選んで、5、6か所を巡ることができるというもので、発着場所は金沢市内の金沢彩の庭ホテルとなっている。

世界的に権威のある「レッド・ドット・デザイン賞」において、最高賞を受賞した「Honda e」を運転しながら古都金沢の美しい景観やアートに触れられるプログラムであり、車好きの旅行者には堪えられないマイクロツーリズムと考える。

秋田におけるマイクロツーリズムを考案する上で、潜在する観光資源を結ぶ移動手段が課題になると思い、この事例を紹介したところである。

続いて、農泊の事例を3か所紹介する。

農泊とは農山漁村地域に宿泊し、滞在中に豊かな地域資源を活用した食事や体験等を楽しむ「農山漁村滞在型旅行」のことで、いわゆるグリーンツーリズムを指す。

一つ目は、三重県鳥羽市の伊勢志摩国立公園の事例である。「海や島」に密着した生活文化や伊勢志摩でしか味わうことのできない自然や食材、歴史を活用した体験プログラム等が好評である。また、教育機関からのニーズとして、釣り体験や、島内探索、クラフト体験等の密を避ける体験学習や野外での活動が人気である。

コロナの影響により、多くの学校が教育旅行先を県内に変更したことや、三重県が県内教育旅行を促進するための支援制度を新設したことで、鳥羽市全体の教育旅行受入れは、前年度の2倍となった。

二つ目は、岐阜県下呂市馬瀬地区での、宿泊+食+体験の連携による事例である。下呂市DMOと連携し、馬瀬地域独自のイベントである「火あぶり漁」や、「あったか祭り」の開催に向けて、ネット広告やYouTubeでの動画公開、チラシ配布などの誘客活動を行ったほか、地域ガイドや特産品、様々な自然体験に関するPRを実施した。その結果、宿泊者数は岐阜県及び愛知県の新規の若年層や自家用車利用の家族層を中心に増加した。

三つ目は、宮城県蔵王町で、空き別荘を利用してワーケーションを受け入れた事例である。無線LANを完備しているためワーケーションに適した宿泊施設となっており、宿泊者は長期滞在する中で、リモートワークで働きながら、レジャーを楽しむことができる。

夫婦や家族連れのほか、在日外国人からの需要があり、長期連泊しているグループもある。宿泊者のうち、マイクロツーリズムとしての利用者が約7割を占めるようになったほか、農産物直売所「蔵王夢づくり直売所」の年間売上げが、前年の2倍に増加した。

(A氏)

月岡温泉は、新潟県新発田市にある温泉である。月岡温泉の温泉街は、町歩きを楽しむための長期的な景観計画を作成するとともに、新潟の様々な食体験やお土産購入ができる新しいスタイルの店舗のほか、温泉にまつわる観光スポットなどを次々に誕生させてきた。

温泉街のおすすめスポットや車で約1時間圏内で行くことができる観光スポットを紹介するWebサイトが「月岡温泉◎ちかたび」である。月岡温泉がある新発田市をはじめ、新潟県北部の広域観光周遊ルートを紹介することで、旅のテーマ性やストーリー性を生み出し、エリアとしての魅力を一層引き出すことを目的としている。月岡温泉を中心とした広域観光周遊ルートの形成は、地域ブランドを創出・支援するといった「新潟観光ブランド確立支援事業」のひとつとして新潟県の補助金で実施されているほか、観光庁の支援も受けている。

次に、山梨県小菅村の事例を紹介する。山梨県小菅村は、東京から2時間ほどの場所にある多摩川源流の小さな村である。

2019年8月にオープンした「NIPPONIA 小菅 源流の村」は、村人700人がホテルのキャストとなり、村全体をひとつのホテルにするというコンセプトによる分散型ホテルである。村に点在する古民家ホテルのうち1か所だけにフロントを置き、その他のホテルには、フロントが存在しない運営スタイルとなっている。地元の人の家に泊まるような感覚で滞在でき、まるで村の一員になったような気分を味わえることが醍醐味である。

そもそも、この分散型ホテルは8年程前に始まった小菅村の地方創生プロジェクトの一つであり、当時過疎化が進み、いずれは村が消滅すると言われていた小菅村において、村長が人口700人を維持すると宣言し、道の駅の開発や村おこしイベントの企画、Webサイトの運営などに本腰を入れて地方創生に取り組んできた結果、約8万人だった観光客が、2018年には約18万人となり、2.2倍に増加した。

フロント棟となる「大家」は、約150年の歴史を持つ地元の名家を改造したホテルである。そして、傾斜が険しい崖に立つ「崖の家」は、2020年夏にオープンしたばかりの新たなホテルである。もともと三密になりにくい分散型ホテルであるが、コロナ禍の中でオープンしたため、より一層感染防止への配慮がなされている。

まず、他の宿泊客と鉢合わせせずに客室でチェックインとチェックアウトができ、チェックイン時には、検温と手指消毒を行う。

食事については、季節に応じた特産品であるヤマメやキノコ、ワサビなどをスタッフが届けてくれる。「崖の家」には、十分な設備が整ったキッチンがあり、シェフが提供しているレシピどおりに調理すれば、簡単にプロの味が楽しめるようになっている。

また、村の周囲には、農園や川、豊かな森林があるため、農作業体験、釣り、狩猟体験といったオープンエアのアクティビティも充実している。都心に住む人々にとっては明らかな非日常であり、三密を回避してアクティブに遊べるのは魅力的である。

最後に、佐賀県嬉野温泉で取り組まれている「嬉野茶時（うれしのちゃどき）」とは、お茶を中心にした斬新な体験を提供する観光企画、いわゆるティーツーリズムであり、佐賀県嬉野市の温泉旅館の経営者等が地元産業とコラボして熱心に取り組んでいる。

「嬉野茶時」では、嬉野市の伝統文化である「嬉野温泉」、「嬉野茶」、「肥前吉田焼」の三つのコンテンツを融合させ、新しい切り口でお茶を楽しむ唯一無二の体験を提供している。

例えば、「嬉野茶時」の一つである「茶泊」では、宿泊中、自分専属の茶師（茶農家）が付き、単にお茶を出してもらえるだけではなく、茶畑へのアテンドやティーセレモニーといった新しいお茶の楽しみ方を体験することができる。

嬉野茶をただ提供されるのではなく、「天茶台」からの素晴らしい眺めとともにお茶を楽しんだり、生産農家の方と話しながら、専用のティーサロンでお茶をいただく「茶話」など、嬉野茶の魅力を五感で楽しめるような様々なプランが用意されている。

このような体験を企画した結果、「嬉野茶時」で使用されたお茶は、市場価格の3倍近くの高額であるにもかかわらず、市内外で開催されたイベントでも人気を博している。

地域に既に存在し、多くの市民に知られている観光資源でも、現代的な新しい観点から他の観光資源とうまく組み合わせることで、これまでにない体験を提供できたことが成功のポイントであると思われる。

(B氏)

以上、全国各地のマイクロツーリズムの事例を御紹介したが、これらの事例に共通する特徴は三つある。

まず一つ目は、宿泊と様々な体験を組み合わせた体験型の観光であるということが最大の特徴である。非日常を感じさせる自然のすばらしさ、またそれを増幅させる様々な観光資源、そして地元産の食材を使用した食の魅力が連動して観光客を引きつけている。

また、二つ目の特徴として、宿泊施設を日常的な生活圏から非日常へと切り替わる場として上手に活用していることである。宿泊を伴う観光の推進は、地域経済に恩恵をもたらす上で、非常に重要である。

そして三つ目の特徴として、複数の観光資源を組み合わせることにより、従来から認識されているものでも、今までとは異なる新しい価値や全体的な魅力を生み出していることである。「嬉野茶時」が良い例であり、その他の事例も新しいマイクロツーリズムを創造する上で参考になるのではないか。

また、どの事例も、コロナ禍のマイクロツーリズムの前提である三密を回避するという観点から、少人数向けのプランとして実施されているが、コロナ禍以前から、旅行市場全体が、団体旅行のようなマストツーリズムから個人旅行などにシフトする傾向にあったため、マイクロツーリズムはもともと現代のトレンドを反映した旅行形態である。

(局長)

最後にマイクロツーリズムの共通項をまとめられていて、単なる事例紹介だけでなく、方向性のヒントのようなものを提示していただいた。

本日のテーマ「コロナ禍におけるマイクロツーリズムについて」ということで、コロナ禍で観光が様々な形でダメージを受けているということもあるが、ある意味、コロナ禍で一番影響を受けているのは、皆さん学生だろうという思いがあった。もちろん、講義等がリモートになったりするなど、環境が変わって大変だということもあるけれども、学生にとってもう一つ大事なことは、社会経験をこの時期に十分に積むことだと思う。旅行という形態に限らず、いろいろな人と関わりを持ったり、経験をしていくことが大事な時期であるにも関わらず、そういった機会を奪われていることが大変気の毒であると思い、本日は様々な情報交換の場にもなればと思う。

また、コロナのようなことは、収束後2度と起こってほしくはないが、また似たようなことがないとも限らない。今回の経験を踏まえて、将来の学生さんたちが同じような思いをしないようにするために、何か今できることがあるのではないかと、もし時間があればそのような部分まで話を深めていければと思う。

まずはじめに、参加者の皆さんからマイクロツーリズムについて企画していただければと思う。秋田にある素材について、これはもっと広く知ってもらい、旅行したり、見に行ってもらいたいというようなものについて、皆さんから発表いただきたい。また、その素材について、テーマ性を持たせたり、組み合わせを工夫することで、魅力的なマイクロツーリズムになるのではないかと、というようなことにもつなげていきたい。

意見交換（前半）

（G氏）

ジュンサイ、ミズ、観光農園をおすすめの素材として挙げたのだが、観光というより、私の好きなものをあげただけなので、皆さんからいいなと思われるかは分からない。加えて挙げたのが田んぼであり、秋田に来て、田んぼがすごくきれいで大きく、それを見ていると悩みごとがちっぽけに思える。

ジュンサイとミズに関しては、秋田に来てから初めて食べた。地元の兵庫県では山菜などはほとんど食べたことがなかったが、近くの三種や男鹿でも買わなくてもそこに生えており、たくさん穫れるので、すごく不思議な体験である。県外から来た私としては、ジュンサイもミズも収穫体験として、十分観光資源になると思う。

私は将来農家になりたくてこの大学に入学した。観光農園については、果樹の観光農園に行った時に、広い農地に様々な種類の果樹がなっており、もちろん収穫体験も良いのだが、幼稚園や保育所の小さい子どもや小学生などを呼んで、収穫体験だけでなく育てる作業から一緒にやるという場面を見ることがあった。秋田はお米の印象が強く、果樹などの印象は弱いけれども、県内だけでなく県外からも子どもたちを呼ぶなどして、そういうところももっとアピールしたら良いのではないかと思う。

（局長）

ミズはどうやって食べるのか。

（G氏）

味つけについては、ユズぼんで食べるのが好き。

（局長）

知事はミズについて何かあるか。

（知事）

皮のむき方がある。私は、皮むきの名人であり、ミズはある程度水分があった方が、むきやすい。古くなったら、根っこを切って水につける。そうすると皮がむきやすい。また、油に合うので、油で炒ってピリ辛で美味しく食べるのが良い。

（F氏）

私は今、大学4年生で、これまで秋田のたくさんの場所に行かせていただいて、本当にどこもすばらしいなと思った。特に秋田県を大好きになったきっかけとしては1年生の夏休みに八郎潟太平自動車学校で2週間の免許合宿を行ったが、その際に、五城目のシェアビレッジと呼ばれる、茅葺き屋根のお家に滞在しながら体験したことが本当に楽しく、毎日溪流釣りに行ったり、温泉に行ったり、地元の盆踊りに参加させてもらったり、だまっこ鍋を作ったり、朝市で食材を買ってバーベキューをしたり、盛りだくさんの2週間を過ごした。先ほどのプレゼンにもあったような非日常を感じ、そこで秋田県の魅力として、自然ももちろんだが、どこに行ってもいろんな方が温かく迎え入れてくださることを本当に肌で感じる事ができ、やっぱり、秋田の良いところってこういうところにあるんだなと強く感じた。田んぼ道で信号がほとんどないので、運転技術が身についたかは疑問だったが、それ以上に秋田の魅力をたくさん知ることができ、免許合宿だけに限らず、社員研

修や県外の修学旅行でもたくさん活用できる方法があるのではないかと感じた。

地図で見ると八郎潟町や五城目町って何もないじゃないかと言われるかもしれないが、実際にそこに滞在することによって、見えてくる新たな視点っていうのもあり、神奈川県で育ってきた自分としては、衝撃を受けた体験だったので、マイクロツーリズムに生かせたらと思う。

(局長)

八幡平の秘湯も挙げているが、具体的にどこのことであるのか。

(F氏)

蒸ノ湯。かなり山奥にあり、そこに行くまでがドキドキだったが、絶景を見ながらの温泉が最高だった。

(E氏)

私は、由利本荘市の折渡千体地蔵と男鹿の雲昌寺を挙げた。どちらも実際に行ってみたことがあるが、折渡千体地蔵は観光情報を調べても見たことも聞いたこともなく、インターンシップの際に教えていただいて初めて知った。秋田県内の観光地は、広い土地を使った、きれいな場所が多いと思う。

(局長)

そこに行くのにどうやって行ったのか。

(E氏)

折渡千体地蔵はインターンシップの時に車で行き、雲昌寺はシャトルバスと電車で行った。

(D氏)

私は、ニテコサイダーと道の駅を挙げた。秋田のお土産が思い浮かばなくて、例えば北海道なら「白い恋人」、東京なら「東京バナナ」を買っておけば間違いないというのがある。ニテコサイダーはデザインに女の子がついていて、レトロなデザインで、いろいろな味もあって、それが並んでいると写真映えもするので、自分で買って飲んでもいいし、お土産として買っていいと思う。瓶だけでなく缶もあれば飲みやすいし、それを自販機で売って、それを選ぶのも楽しいと思う。

道の駅は岩城に限らず、県内に意外と面白いところがたくさんあって、地元で採れた野菜や、地元の方が作った惣菜などが売られていてすごくローカルな楽しみ方ができると思う。

道の駅岩城は、温泉が付いていて、夕方には日本海の夕日が見えてすごく景色がいいし、私は利用したことはないけれども、コテージも付いているので、そういう楽しみ方もできると思う。

(局長)

ミツヤサイダーよりもニテコサイダーの方が魅力を感じる理由はあるか。

(D氏)

ミツヤサイダーはほとんどがペットボトルだと思うが、ニテコサイダーは瓶であり、瓶で飲むと気分的においしい。また、ニテコサイダーは結構さっぱりしていて大人でも飲みやすいと思う。

(C氏)

私は、秋田犬と角館の武家屋敷を挙げた。

秋田犬は海外でも人気で、名前を出した時点で秋田がすぐに分かりPRになることに加えて、かわいいのでいろいろなところから人が来ると思う。

角館の武家屋敷は、2年前のゴールデンウィークに行った際、ドイツから来た方々と一緒だったのだが、日本の歴史的な町並みがすごくきれいだと驚いており、好評だった。やはり秋田の人が見ても海外の人が見ても素晴らしい町並みであり、今後も保存し残していければと思う。日本は木の文化で保存が大変であるが、しっかり守っていければ、将来、人気の観光スポットになっていくと思う。

(B氏)

私は、聖体奉仕会と象潟・ねむの丘を挙げた。

ねむの丘は私が好きな観光スポットで、今回は聖体奉仕会について話したい。聖体奉仕会というのは、マリア様が涙を流す、その像が発見されたという修道院である。

秋田県は、そもそもコロナ禍以前から、国内の日本人観光客、そしてインバウンド観光客が少ないという状況にあると思う。そういった中でグローバル体制を作っていくことが、今後の秋田県に必要なことだと思うが、修道院には外国語版のWebサイトもあるので、聖体奉仕会の協力を得て、国内外でPRをしていくことがいいと思う。また、この聖体奉仕会に限らず、秋田県に眠っている観光資源は多いと思うので、そういったものをどのようにPRしていくかが今後の課題であると思う。

(A氏)

私は、バナナボートとブルーメッセあきた、小坂鉱山事務所、元滝伏流水の4つを挙げた。

バナナボートについては、自己紹介の時にも話したが、私は秋田商業高校出身であり、その際の経験に基づいた話である。毎年県内の商業高校がたけや製パンとコラボして、バナナボートの新商品の開発を行っている。皆さんは一度見たことがあると思うが、県外の人にもPRできたらと思い、紹介している。

ブルーメッセあきたについては、先ほど話題にもあったとおり、秋田県内の道の駅は素晴らしく、このブルーメッセあきたは温室がある珍しい道の駅である。温室でも、季節ごとにクリスマスやハロウィンのほか、チューリップのイベントなども開催しており、ローカルな食べ物を買うのももちろん、そういうイベントを楽しむことができる道の駅になっているので、皆さんにも紹介したい。

小坂鉱山事務所については、大学生になってから観光で初めて訪れた場所であり、異国に行ったような感覚を味わうことができる。ドレスの試着などもできるのだが、3日前に予約しないと試着できないので、そのような情報がないと着たくても着れないということが起こる可能性があり、情報をどのように知らせるのか、PRの方法に工夫が必要だと思う。

元滝伏流水は学校の授業でにかほ市を訪れたことがきっかけで、その後プライベートでも訪れるほど大好きになった。もともと自然が大好きで、自然豊かな場所を訪れることが

多い。この滝は、一つの岩が有名になっており、そこで、大学の友達と一緒に岩を支えるようなポーズで写真を撮ったりするのが、新たな楽しみ方だなどと思い、紹介させていただいた。

(知事)

年代によるが、我々の年代だともともとマイクロツーリズムはあった。昔は団体旅行として、県庁では土曜日が半ドンであり、お昼から職場(課単位)で、男鹿市や雄和へ1泊しにいったものだが、土曜日が休みになって、そのような風習がなくなった。昔は、団体のマイクロツーリズムが日常だったが、これが無くなってから団体旅行が廃れてきた。

場所や対象物がはっきりしているところ以外で、例えば夕日や朝日がきれいなところや、鳥海山の朝の風景が最高にきれいなところなど、観光地以外の展望もある。全県を回っているとなんでもない道端のある地点から見る男鹿半島がきれいだという場合もあり、そういうジャンルがあってもいいと思う。

最近はお年寄りから子どもまで皆さん暇で、奥さんは旦那さんがコロナの影響で朝から晩まで家にいるから大変である。地元秋田の人が、近場のホテルに奥さんを連れていくと、掃除や食事の支度がいらないので喜ばれる。ホテルに泊まると、上層のホテルの窓から見る景色など、新しい発見があるが、残念なのは他にすることがない。ホテルに泊まったら、近辺に珈琲のうまい店があるなど、何かセットであれば良い。マイクロツーリズムは、観光地でなくて非日常。高齢者は出かけるのが大変で、飛行機や新幹線に乗ることも億劫になり、ある年になると自動車免許も返納するので、タクシー、バス、場合によっては歩いて行ける、そういうところでの非日常がこれから需要として出てくるのではないかな。そうすると、ホテルは近場の方を優遇して泊めるような流れも生まれる。今後は、年代の階層ごとに少しずつ求めるジャンルが違ってくるので、これにうまく対応できることが大切である。

意見交換(後半)

(局長)

皆さんから出していただいた観光地や特産品の中で、一番のおすすめとそれを商品化するにあたっての仕組みや活用方法などについて、どのようなものが考えられるか。

(A氏)

私は、元滝伏流水を一番おすすめする。そこで滝を見て癒やされるほかに、若者はSNSへの投稿も楽しみの一つであるため、きれいに写真を撮ることができるコツやポイントなどをPRするのはいかがか。滝まで若干距離があり、お年寄りには大変なので、高齢の方にも楽しんでもらう方法が何かあれば良いと思う。

(B氏)

私は、秋田ノーザンハピネッツを挙げたい。ハピネッツは土日に試合があり、土曜日の試合観戦後に宿泊してもらえると経済効果も高まる。ハピネッツの他にもノーザンブレッツ、ブラウブリッツもあり、今後の観光の武器になると思う。

(C氏)

私は、秋田犬を選ぶ。秋田犬は他のものに比べて、動かすことができるので、道の駅や鳥海山、雲昌寺などあらゆる場所で秋田犬ふれあい処を作り、写真を撮ったり、SNSに

投稿できるようにすることでPRにもなるので、他のものと組み合わせることにより、一層興味をひくものになるのではないか。

(D氏)

私が一番推したいのは、日本酒である。ゼミナールで大仙市の日本酒プロモーションに携わる機会があり、それまでは日本酒を飲んだことはなかったが、酒蔵を見学した際に作り方の説明を聞いてから飲んで美味しいと感じるようになった。また、日本酒はお土産として売っているが、例えば、宿泊施設などで試飲として提供したら、普段は飲まない方にも味わってもらえて面白いのではないか。

(E氏)

私は、雲昌寺を挙げたい。ただ、車を持たない学生からすると、移動手段はバスや電車に限られ、移動が大変であるし、時間もかかる。移動時間を短縮できたら、もっと行く人が増えると思う。また、男鹿の道の駅とつなげられるようにすると、もっと盛り上がるのではないか。

(局長)

雲昌寺に行った際に、他におすすめのスポットはあったか。

(E氏)

男鹿水族館G A Oやカフェににぎがよかった。ただ、歩いて移動したので、時間がかかり大変だった。

(F氏)

私は、国際教養大学の図書館をおすすめしたい。秋田市雄和は市街地から車で30分と少し遠いと感じる場所であり、なかなか訪れる機会はないと思う。ただ、海外の大学、例えばオックスフォードやハーバードはその地域の観光資源になっている。特に、国際教養大学の図書館は日本一美しい図書館と言われており、まだ利用したことがない方にはコロナ収束後は是非利用してもらいたい。また、秋田市雄和は自然がたくさんあり景観もきれい。農家レストランで山菜を食べるなど楽しみ方も様々ある。国際教養大学を拠点に、秋田市雄和を堪能してもらいたい。

(局長)

国際教養大の学生がよく行っている場所はあるのか。

(F氏)

学生たちは、図書館で勉強した後、川や滝に入ったり、夜は星空を見るなどして自然に触れ、楽しんでいる。

(G氏)

私もEさんと一緒に、死ぬまでに行きたい場所と言われている雲昌寺をおすすめしたい。今でもたくさんの観光客が訪れているが、今後ももっと人が訪れる場所だと思う。男鹿は道が狭く、くねくねしていて危ない。自家用車で行くと地域の人が迷惑している場合があるので、道の駅オガーレや男鹿駅を起点とし、乗り降りが自由にできるバスなどで観光地

をつなげるようにしたら良いと思う。

(局長)

男鹿のアクセスが問題になっているが、レンタサイクルはどうか。

(G氏)

一つ一つの観光場所が遠いので、体力的に厳しい。

(局長)

マイクロツーリズムの話をしてきたが、コロナが収まり、就職後や家庭を持った時など、何年か先を見越して、皆さんの中でマイクロツーリズムはどういう存在になると思うか。また、県としてはマイクロツーリズムを定着させていきたいが、そのためにはどのような環境を整えたらよいか。

(C氏)

コロナ収束後は、県外に行く人が増えると思う。でも、小さい子どもがいる家庭や高齢者は遠出が難しいので、マイクロツーリズムはある程度は残ると思う。秋田は交通の便が悪いので、先ほどの事例紹介にあったように、電気自動車の貸し出しや高齢者や運転が苦手な方向けにマイクロバスを出すなど、いろいろな人が観光しやすい環境にしたほうがよいと思う。

(B氏)

コロナが収束すると、若者は県外に目が向いてしまうと思う。ただ、私の祖父母は県外旅行に誘っても行かないので、高齢者などにターゲットを絞ってマイクロツーリズムを進める必要がある。注目が集まっている今こそ基盤を作り、推進していくことが大切。秋田県の観光は点の状態であり、線をつないだ形にしていくべきである。

(A氏)

私もマイクロツーリズムは小さい子どもがいる家庭や高齢者向けに続いていくと思う。県内旅行だとお金がそこまでかからないので、観光に行きたいがお金に余裕がない人向けに進めていくことも選択肢の一つだと思う。また、県内の観光地である仙北市は宿泊施設が少ないという問題があるので、空き家の活用も進めていくべきである。さらに、スタンプラリーなどを実施し、スタンプを集めるとサービスが受けられるなど工夫したらリピーターが増えるのではないか。

(局長)

何か仕掛けが必要だという提案だったが、情報発信についてはどうか。

(A氏)

秋田県は高齢者が多いので、テレビなどのマスメディアを使った情報発信が有効だと思う。

(D氏)

高齢者などのほかにも、大学生や長期休みが取れない社会人も週末を利用して日帰り旅

行するなど、県内観光ををすると思う。秋田は自然の観光スポットが多いが、屋外では天候に左右されやすいので、屋内の体験型施設がもっと増えると良い。情報発信については、若者向けはSNSやYouTubeの活用が良いと思う。自分自身も体験を紹介しているYouTubeを見て参考にしているので、秋田バージョンを作ると面白い。高齢者向けには地元のローカル番組でモデルプランを紹介すると良いのではないかな。

(局長)

SNSではどのように情報を発信すれば良いと思うか。

(D氏)

個人的にフォローしている特定の人から情報を取得するが、例えば県のチャンネルを作り体験を試みたい大学生などを募集し配信したら面白いと思う。

(局長)

行政のチャンネルを見ることあるか。

(D氏)

たまに広告で流れてきたものを見るときはある。

(E氏)

やはり移動が大変であるので、シャトルバスなどを使った観光プランがあると、これからもマイクロツーリズムは続いていくと思う。情報発信は、CMなどで地元の有名な観光地を紹介すると、認知度が上がるのではないかな。

(F氏)

マイクロツーリズムは名前こそコロナ禍で広がったが以前からあったので、コロナ収束後になくなるものではない。ただ、アフターコロナで外国からの観光客が増えると思うので、外国語への対応も必要である。実際、外国人の友達が県内旅行した際、入道崎に行きたかったが行き方がわからず、男鹿駅で近くの人に聞いても誰も英語がわからず、入道崎に行かずに帰ってしまったという話を聞いた。その話は私の中で衝撃的で、そのようなことがあると秋田のことが嫌いになってしまうと思う。アプリを利用するなど、最低限これを見れば分かるなど、外国語への対応も行政で力を入れてもらいたい。

(G氏)

私は大学生にこそ焦点を当てるべきだと思う。コロナが収束すると、解放された気分になり県外や海外に目を向ける人は多くなると思うが、長期の休みばかり取れるわけではないので、近場の観光も重要になる。大学生は、学生の期間で行ける場所は限られており、私自身も4年間秋田にいて、県内全部回れたかというところはまだまだ行っていない場所がある。卒業後も秋田に残りたいと思えるような補助的なものも必要だと思う。秋田に残りたいが給与が低く県外に就職した友人もいるので、給与や家賃補助など、行政でもっと支援を行い、大学生に県内に残ってもらい、マイクロツーリズムを行う人の母数を増やすのはどうか。

(知事)

観光はなかなか難しい。例えば、フランスはサービスはマイナスでも、世界で一番観光客が訪れる。フランス語以外の言葉が通じるところはほぼないが、それでも観光客が多く訪れるのが現状。

また、食べ物の話題が出なかったが、由利本荘市の「イトキン食堂」はカツ丼が有名であり、渋滞ができるほど。太平山の「山の五代」も交通の便が悪くても人気である。首都圏とは違い、日本全国を見ても交通の便が全てよいというところは少ない。乳頭温泉でバスが多く走っているのは、ペイするからである。観光から税収は増えないが、観光に伴うお酒などから税収が増える。観光する際に、いかに食事や購買してもらおうかが重要である。お金を使う層は交通の便は関係ないが、それには魅力があることが大事である。小さいものでもそこにしかないもの、その魅力をどのように発信するか、その客層をどのようにターゲットにするか、サービスでいかにお金を使ってもらえるか。その戦略が非常に大事である。

皆さんには経済的な面も踏まえて、どのように組み立てるかを考えてもらいたい。行政で観光地にしようとしても、相手方が望まないケースもある。また、鳥海山は全て見所であるために、ポイントとなる場所を作りやすく、情報発信が難しい。

ターゲットを誰にして、どのようにお金を使ってもらおうか、行政自身も手探りのところ。客層により求められるものが異なるために難しいので、そういった面も踏まえて具体的なモデルプランや細かい分析を考えてもらいたいと思う。

(局長)

今後に向けて行政への意見があれば教えていただきたい。

(D氏)

交通の便が悪いという意見が多かったが、各地で観光地を回るバスなどがあると良い。また、英語が通じず断念したという意見もあったが、私もバスに乗っている時に外国人観光客と乗り合わせた際に、値段表示で苦戦している様子を見た。例えば、循環バスで一律の値段にすることによって、気軽に利用できるのではないか。

(E氏)

今までの意見を聞いて、県内外の方にどのようにアプローチしていくかが重要だと思う。観光地の魅力を高めることで、秋田県の良さを伝えることができるのではないか。

(F氏)

私は、正直コロナが収束することはなかなか難しいと思う。ワクチン接種も日本ではあまり進んでいない。また、ニュースを見ると若者が悪く報道されている。若者が田舎や観光地に行った際に歓迎されるのか疑問である。完全にコロナの感染が抑えられる状況にならないと、多くの方に楽しんでもらえる状況になるのは難しいと思う。

(G氏)

少し話がずれるが、今農業人口の高齢化が進んでいる。私は農業に携わりたいと思い、秋田県立大学に進学し、卒業後は2年間の農業研修を受ける予定である。しかし、県内各地を回っていると、土地がないと農業は難しいと言われる。自分は県外出身で、学生で土地は持っていない。また、研修期間中は生活補助で10万円支給されるが、家賃や食費等を考えるとぎりぎりの生活になる。これは親元就農ばかり考えられているからではないか。

親元就農は多いが、それでは若い人は農業に就きにくく、農業人口も増えない。私は潟上市の果樹試験場で研修をする予定で、今後男鹿市の農業組合と相談予定である。

(C氏)

私個人としては、秋田県の観光地自体は素晴らしいと思うが、その周辺のトイレや土産物店が整備されていない場所が多く、施設整備を行ってほしい。リピーターになってもらうためには訪れた人たちに気持ち良く観光をしてもらうための整備が必要だと思う。

(B氏)

観光は秋田県の成長分野。DMO団体と連携を図りながら、観光分野を活性化していただいたい。

また、あきたこまちは全国的に有名だが、米菓では上位に入っていないので、意識すべきである。

(A氏)

交通網を充実させすぎると、滞在時間が減りお金を落とさなくなる懸念もある。角館の武家屋敷では滞在時間が短すぎて、お金を落としてもらえないという問題があると聞いた。仙北市は空き家も多いので、空き家を活用し宿泊施設を作り滞在時間を延ばしてお金を使ってもらおうようにすると、空き家対策にも経済面でも良いと思う。

知事総括

高齢化が進み、近場の観光は増えると思う。近くの美術館を訪れることもマイクロツーリズムであり、固定観念で旅行と捉えず、自分の年齢や体力、収入などに合わせて人生を楽しむ、まさに非日常を近場で楽しむ、そういった捉え方をすると選択肢が増える。旅行と捉えるよりも、近場で学習する、知らないことを覚える、家族の絆を深める、そういった視点を踏まえていくべきである。いろいろなジャンルで垣根を越えて、その人の個性に合わせて人生を楽しむ、学習していくと可能性が広がる。皆さんにも、生活を楽しむ、そういう意識をもって学生生活を送ってほしい。(了)